

大谷学会秋季公開講演会要旨

謝靈運の文学に対する仏教の浸透

平野 顕照

謝靈運(385—433)といえは、「宋初の文詠、体に因革有り。莊老は退くを告げ、而して山水は方に激し。」と梁の劉勰が「文心雕龍」明詩篇に指摘するように、中国に於ける文学ないしは思想の歴史の変革をもたらす、山水文学を形成したユニークな人物である。また、南朝文人の代表的人物に数えられてもいる。よつて、かれを一般に山水詩人とよび、後世の文学にも少なからぬ影響を与えたことが認められている。

かれは、南朝貴族社会の二大氏族である王・謝のうち、陳郡の謝家に出生した。有名な田園詩人といわれる陶淵明(365—427)より二十も年若い。貴族という社会的に安定した身分と、恵まれた経済との環境のなかに生長し、好むと好まざるとにかかわらず、宿命的に貴族生活を身につけざるを得なかつた。いわば、かれは自然に六朝貴族の典型に引入れられていた。併せて、かれは「文章の美」江左に連ぶ莫き才能に恵まれ、かれの祖父、謝玄が、「孫にしてはできすぎた子である。」と称讚し、大変かわいがつたと正史に伝えている。そして、その才能によつて作られた文学作品は、謝靈運集五十巻を始めとして数多くあり、唐時代まで伝世していたのであるが、こんにちで

はその何分の一にもたりない作品量しか現存しないのはまことに残念なことというほかない。

謝靈運は東晉末より宋初にわたり、二つの王朝にその四十九年の一生を送つてゐる。晩年、かれに決定的な不幸をもたらした棄市の刑を受ける遠因は、会稽太守・孟顛の熱心な仏教信仰に対する批判に始まつてゐるといつてもよい。この批判ができたのは、かれが比較的早年から仏教の素養を培つてゐたことによるのである。かれの一代に於ける仏教に關連する業績をとりあげてみてかなり多い。仏影銘、慧遠法師誄、弁宗論などの製作および涅槃經の改修などはその主なものである。これら業績の背景には、謝靈運の性格および生活環境、時代の趨勢などが作用してゐることを忘れてならない。

謝氏一族は遠く謝安の頃から仏教との因縁深く、一族の人は世々仏教に尊崇の念をもつて対してきた。また、僧侶との交渉が貴族の一風習のような傾向にあつた。それ故、謝靈運も自然のままにその後塵を受け、廬山の慧遠と交渉をもつこととなつた。また、宋の武帝の第二子、廬陵王義真の幕下で、顔延之、僧慧琳らと親交をもつてゐた。この親交に興味ある問題が藏せられてあると思う。一つには、性格的に共通した人たちのグループということである。恰も類は友をよぶという観さえ感ぜられる。即ち、かれらには我儘な気性の強いところがあつた。かような性格が、却つて為政者の反感を招く原因ともなり、謝靈運が名門の出身に似合わず、出世コースを歩めなかつたことにもなつてゐる。また、孟顛に対する仏教批判もこうした性格が幾分作用してゐるものと思われる。しかし、慧琳との親交によ

つて、かつて慧遠から受けた以上に、かれの仏教に対する造詣が一層深められたとはいなめない。二つには、慧琳は白黒論を著している。これは一つの仏教論争を内容としたものである。この頃の趨勢として、内容のいかんを問わず、かような仏教論争が普遍的に流行していた。この仏教論争は、魏晉に風靡していたところの、老莊思想をふまえた清談の亜流と思われるが、謝靈運もその時代の風潮に迎合して、弁宗論を以て参加している。ここにも慧琳の影響、ひいては仏教への関心の並々ならぬものをかれがもつていたことを示している。この二つの興味ある問題を含む廬陵王義真幕下の親交および多くの仏教業績に認められる謝靈運の仏教体験が、かれの文学形成にどれほどの効果をおさめたことであろうか。

結論的にいつてつぎのように考えられる。一つには、謝靈運以前に仏教思想に連関する作品をものした文人はあるが、^⑤ 仏教用語を詩作のうえに応用した文人は明らかにかれをもつて嚆矢とするに足る。即ち、文学作品に仏教を応用する可能性を如実に実践してみたことに於て、かれは成功した人物であるといつてよい。したがつて、伝統的詩思の世界が拡大されたことになる。つまり、景物なり感情なりを詠歌する時間のないしは空間の限界を、さらに拡大することに仏教を役立てた。この点に於て、仏教のもつ超時間的、超空間的な思想言語を応用することが甚だ有利であつた。その有利さを活用することに成功した功績は大きい。いま一つには、かれが仏教を文学作品に応用してみたところ、自然を対象とするあの流麗清輝を誇る作品を形成した技巧も、この方面ではまだ充分に發揮されていないうら

みがある。この点では残念ながら不成功に失しているようである。その原因にはつぎのようなことが考えられる。それには、仏教論争の風潮がわざわいしていると思われる。即ち、かれの仏教に対する関心が、多分に理論的に傾いて、文学作品全体の大勢にとりたてて効果を現わすところまで、仏教のもつ機能を消化して応用することができなかったといえよう。また、かれの弁宗論にも認められるように、幾ばくかの修道を体験しないで、直ちに仏教の真理に悟入しようとする意識が、却つて独善的、高踏の弊害に陥入らしめている。そのため、仏教悟入に関する契機の迫力感に乏しく、むしろ、観念的に傾斜していることも原因していると思われる。したがつて、文学作品のうえに潤沢さをもたしめないで、却つて空虚な味気ない表現としかうつらないように思われる。もつとも、仏教用語は、ある意味で論理的であり、抒情性に乏しいものであろう。しかし、咀嚼が充分であれば、かような不利は大きな障害とはならない。梁高僧伝に伝える「靈運は才(能)に余り有れども、(智)識足らず。抑々其の身を免れず。」といつた僧苞のことは案外こうした方面の不成功を看破したものと受けとめてよいのではなからうか。所詮は、自然を対象としてユニークな文学を大成することに成功し、「元嘉の雄」と梁の鍾嶸をして詩品のなかで上の部に品第せしめた謝靈運も、いま一步、仏教を取扱つての文学作品には、その巧みさを發揮することができなかったといえないであろうか。

以上のべたところをわずかの例をあげて説明しておこう。
かれの作つた晩年の「臨終の詩」

龔勝無余生

龔勝は余生無く

李業有窮尽

李業は窮尽有り

嵇叟理既迫

理既に迫しく

霍子命亦殞

命亦た殞なう

悽悽陵霜柏

悽悽たり 陵霜の柏

網網衝風菌

網網たり 衝風の菌

邂逅竟無時

邂逅は竟く時無く

修短非所慙

修短は慙む所に非ず

恨我君子志

恨むらくは我が君子の志

不得巖上涘

巖上に涘すを得ざるを

送心正覺前

心を正覺の前に送り

斯痛久已忍

斯の痛久しく已に忍ゆ

唯願乘來世

唯だ來世に乗じて

怨親同心睽

怨親心を同じうする睽を願わん

とは、節操のために敵として身を守つたが、結果的に、悔なく一生を過せない破目に陥入つた残念さを歌つたものと思われ
る。「臨終の詩」という題名は過去、歐陽建の作品にあり、文
選に収められて有名である。そのほか、謝安、謝玄と親交のあ
つた前秦の苻朗にも作られている。それらは謝靈運の詩と比較
して臨終の詩を作らしめる動機が、節操保持が招いた身の破滅
という点で共通している。ところが、その臨終の心情を仏教の
世界にまで拡大して歌詠したのは謝靈運に於て顕著である。同
時に、仏教用語を詩作のうえにみごとに応用してみせている。
ただ來世を願う詩としては幾分、観念的に流れ、迫力に乏しくさ
え感ぜられる。また、仏語を用いた詩構成にどこことなくきこ

ないところが残っているようである。仏教の消化が足りれば、
いまま少し、全体の調和をはかる技巧的操作が行なえたと思われ
る。

いま一つ、

四城有頓蹟

四城 頓蹟有り

三世無極已

三世 極已無し

浮歎昧眼前

浮歎は眼前を昧くし

沈照貫終始

沈照は終始を貫おす

壯齡緩前期

壯齡 前期を緩め

顏年迫暮齒

顏年 暮齒に迫る

揮霍夢幻頃

夢幻の頃を揮霍せば

飄忽風電起

飄忽として風電起る

良緣迨未謝

良緣 未だ謝せざるに迨び

時逝不可俟

時逝 俟つべからず

敬擬靈鷲山

敬しく靈鷲の山を擬い

尚想祇洹軌

尚お祇洹の軌を想う

絶溜飛庭前

絶溜 庭前に飛び

高林映臆裏

高林 臆裏に映ず

禪室栖空觀

禪室に空觀を栖まわし

講宇析妙理

講宇に妙理を析く

(石壁にて招提精舎に立つ)

この詩は始寧に生活していた時の作品である。最初の二句は
釈迦の出家を意識して措辞されたのであろうが、この詩にとつ
て、大きな効果をもたらす句ではない。どこかあとの句との連
関性に乏しいきらいがないでもない。しかも、詩全体は技巧に

余りにも走りすぎて、この詩を作らしめるに至つた心情の凝縮さが充分に表出されていないようである。このところにもかれの観念的な表現が認められるのである。いづれにしても、かれの貴族の出自にまつわる宿命的なものが、仏教を取扱つた作品にかような客観的表現をもたらしているといえよう。限られたスペースによつて充分のべられないうらみがあるが、この問題は謝靈運の文学の一端についての未熟な試論である。

〔昭和三十八年度文部省科学研究費各個研究・文学に対する仏教の浸透の成果の一部である。〕

注

① 最近の著作である、小尾郊一氏の「中国文学に現われた自然と自然観」(岩波書店)に、山水文学形成までの過程と、その後の影響などが詳しくのべられてある。よつて、諸先輩の研究成果もこの著書に収録されてあるので、再び列挙しない。

② 晉書卷七十九・宋書卷六十七・南史卷十九。

③ 隋書經籍志には、謝靈運の撰になる、賦集九十二卷、詩集五十卷、七集十卷、連珠集五卷などあり、宋の張敷・袁淑らが補訂した謝靈運詩集一百卷があつたことを記録している。このほか、要字苑一卷、晉書三十六卷、遊名山志一卷、居名山志一卷などが著されていたことを伝えている。

旧唐書經籍志、新唐書藝文志には、謝靈運詩集五十卷の存在を伝えているが、宋史藝文志には謝靈運九卷と記録され著しく量的に減少している。このことからすれば、唐時代以後、かれの詩集は本来の形をもつて伝世していないこと

が認められよう。

④ この問題の考察にあつて、黄節が注した謝康樂詩注(人民文学出版社)を主として、全宋詩を参照した。そのほか、文選、芸文類聚、歷代詩話、統歷代詩話、詩藪、詩品、文心雕龍、世説新語、梁高僧伝などが参照の主なもので、次にあげる論著にも多くみえている。

陸侃如・中国詩史。

郭紹虞および羅根沢それぞれの文学批評史。

湯用彤・漢魏兩晉南北朝仏教史。

青木正児・支那文学思想史。

〃・支那文学芸術考。

小尾郊一氏の前掲著書。

福永光司氏の「謝靈運の思想」(東方宗教十三・十四合併号)。

などを参照し、裨益せらるるところ多かつた。

⑤ 福永光司氏の「嵇康と仏教——六朝思想史と嵇康」(東洋史研究二十・四)、「陶淵明の真について」(東方学報第三十三冊京都)に詳しい。

⑥ 梁高僧伝、卷七、釈僧菴伝所載(大正新脩大藏經)。